

所属	心理学研究科 臨床心理学専攻 修士課程	修了年度	2019 年度
氏名	渡辺 彩夏	指導教員 (主査)	笹川 智子

論文題目	大学生の自閉スペクトラム症傾向とアタッチメントスタイルが抑うつとパラノイア傾向に与える影響
------	--

本文概要

【問題と目的】

近年、青年期における発達障害が注目されており、自閉スペクトラム症の二次障害として引き起こされる抑うつや、パラノイア傾向が問題とされている。これらの二次障害は、対人関係のトラブルが繰り返されることで起こると示唆されている。例えば、自閉スペクトラム症の人の社会的スキルの低さやコミュニケーションの苦手さは抑うつ傾向を促進すること（高岡，2015）、思春期のアスペルガー症候群では、健常者に比べていじめを受けやすいため、パラノイア傾向が高まること（杉山，2008）などが示されている。本研究では、アタッチメントスタイルが様々な対人関係上の問題の発現を抑制する効果を示す点に着目し、自閉スペクトラム症傾向を持つ者であっても、アタッチメントスタイルが安定していれば、抑うつやパラノイア傾向が低くなるという仮説を検討することを目的とした。

【方法】

大学生 376 名を対象に、無記名式質問紙調査を実施し、回答に不備のあったデータを除いた 347 名（男性 136 名，女性 211 名）を分析対象とした。質問紙は、①属性（年齢，性別），②A-ASD のうち自閉スペクトラム症に関する項目，男子 20 項目，女子 23 項目（福西，2016），③一般他者版愛着スタイル尺度 30 項目（中尾・加藤，2004），④BDI-II ベック抑うつ質問票 21 項目（小嶋・古川，2003）⑤日本版パラノイア・チェックリスト 9 項目（山内・須藤・丹野，2007）で構成された。調査は 2018 年 10 月～12 月に、講義時間の前後において、集団式で実施した。個人情報の保護，回答の任意性，データの使用用途等について，口頭および書面にて説明し，同意を得られた者に対してのみ調査を実施した。

【結果と考察】

はじめに，男女で自閉スペクトラム症傾向に差があるのかを検討するため，A-ASD 得点の t 検定を行ったが，有意な差は認められなかった。A-ASD と他の 3 変数の相関を男女別に算出したところ，男子においては親密性の回避とパラノイア傾向の頻度が，女子においては，親密性の回避とパラノイア傾向の苦痛度がそれぞれ無相関であったが，それ以外のすべての因子間では有意な正の相関が見られた。抑うつを従属変数，自閉スペクトラム症傾向の高低群とアタッチメントスタイル 4 群を独立変数とした分散分析の結果，自閉スペクトラム症傾向とアタッチメントスタイルの主効果のみが有意であり，交互作用は見られなかった。パラノイア傾向の 3 下位尺度を従属変数とした場合にも，いずれの下位尺度においても交互作用は見られなかったが，頻度と苦痛度を従属変数とした際にはアタッチメントスタイルの，確信度を従属変数とした際には自閉スペクトラム症傾向の主効果が有意であった。このことから，アタッチメントスタイルが安定していれば，抑うつ，およびパラノイア傾向の頻度と苦痛度は，低くなることが示された。アタッチメントスタイルは変容可能な要因であると考えられており，新たな満足できる人間関係の構築によって安定することが想定されている。このことから，カウンセリングなどの場面において安定したアタッチメントを形成するようなアプローチの有効性が示唆される。自閉スペクトラム症傾向が高い者の方が被害妄想的観念に対する確信度が高かったことを考え合わせると，それまでとは異なる安定した関係を経験することにより，被害妄想的な観念を抱いても，それを確信せずに妄想的な観念として理解することができるようになると考えられる。